〔書　評〕

小林賢次著

『狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究』

坂詰力治

小林賢次氏は日本語史の立場から、古代語から近代語（現代語）への日本語の変遷の過程を、中世後期の室町時代から近世の江戸時代にかけての諸文献をもとにして明らかにすべく一途に研究して来られた方である。その研究方法の手堅さは既に学界において定評のあるところである。

本書は、その序章（はじめに）に記されているように、室町時代から江戸時代にかけての口頭語の中心資料となる狂言台本を用いて、「その他中世から近世にかけての口語文献を資料として、特に語彙・語法（文表現・敬語などを含む）の各方面から、近代語成立過程期における史的変遷の様相を考究しようとするもの」である。

狂言台本を中心としながら、日本語史上、古代語から近代語への過渡的現象として見られる音便や二段活用の一段化など動詞に関する事柄、助動詞、敬語など広く語彙・語法を中心に考察した研究並びに狂言台本における流動の状況や狂言師の狂言語に対する規範意識などに関わる研究は、蜂谷清人氏の『狂言台本の国語学的研究』（昭和五二）、『狂言の国語史的研究――流動の諸相――』（平成九）などにすぐれたものがあるが、本書は狂言台本について、流派や時代的な相違に着目し、言語資料としての性格を明らかにして、既存の研究成果を踏まえながら、あるいは別の視点から発展させ、あるいは史的観点から新しい問題を取り上げて綿密な考察をされているところに特色があると言える。

本書は、序章（狂言のことば――その特質と研究状況――）と終章（まとめ）を添えて大きくⅠⅡⅢの三部から構成されている。すなわち、第Ⅰ部では言語資料としての狂言台本の資料性を追究し、第Ⅱ部では狂言台本を対象とした語彙・語法に関わる言語事象を検討し、そして第Ⅲ部では狂言台本その他を資料として、中世語・近世語のさまざまな問題を発展的に考察するというように、著者の目標への過程が段階的に明らかにされるようになっている。以下、この過程を順次追っていくこととする。

第Ⅰ部　狂言台本の資料性の考察

第Ⅰ部は、

第一章　言語資料としての天理本『狂言六義』

第一節　『狂言六義』上巻から下巻にかけての言語の変容

第二節　「本文」「抜書」の成立とその詞章

第三節　『狂言六義』の筆録者再考

第二章　言語資料としての和泉家古本『六議』

第三章　『大蔵虎寛本』能狂言』における衍字・脱字の校訂について

の三章から成る。

狂言のテキストとして古く伝えられているものは、室町時代に書写された天正狂言本のみで、しかもこれは筋書き的性格を持つものであって、台本としての形式をもつテキストの出現は大蔵流の祖本と見なされる江戸時代書写の虎明狂言本を待たなければならなかったと言われ、また、和泉流の祖本と見なされる天理本『狂言六義』も江戸時代の書写によるものであるが、虎明狂言本と比べると、筋書き的な部分も多く、十分に台本としての形式を整えていないと言われている。このようなことから室町時代に成立・発展した狂言の最古の台本と言われるものは江戸時代初期に作られていることになるが、それは室町時代的なものの中に江戸時代的な言葉の混入を推定させることになり、狂言台本を言語資料として利用するには狂言の言葉の流動の実態を見極め慎重に扱うことが必要となる。第Ⅰ部の論考は叙上のことを十分に理解し、認識した上でなされたもので、第一章は天理本『狂言六義』(上・下・抜書)(評者注、以下、天理本と略称)の筆録者に関する考察である。第一節では、この台本が和泉流の現存最古のものであり、大蔵流の虎明本に匹敵する台本であるにもかかわらず、筆録者や成立事情が明記されていないため、成立時期が不明確であることとともに、言語的にも、上巻及び下巻の使用状況が必ずしも等質的でなく、上巻と下巻とで、あるいはその内部で種々の相違を見せていることから、上巻から下巻へと執筆が進むにつれて、筆録者の用語意識にさまざまな変動が生じていることを明らかにする。そしてさらに下巻の一部に集中して見られる「サラバ」の漢字表記を通して、天理本全体の筆録が同一人によるものかどうかという疑問を提示する。天理本は従来、山脇和泉家初代元宜道仙、または二代元永道意いずれかの手になるものと考えられてきたが、第二節では、天理本の六義「本文」下巻及び「抜書」に見られる複数の筆跡を、字形の特徴から影印本を用いて具体的に分析検討することによって、「本文」上巻全体及び下巻の第六十九番までと「抜書」を元永道意の筆、その病没後、残りの部分を元宜道仙が筆録して完成させたと見るのが妥当であると推定する。しかし第三節では、池田廣司氏によって和泉家古本の書写者と目されている三代元信道甫が天理本の筆録にも関わっているという田口和夫氏の指摘を契機として、天理本と和泉家古本との関わりをさらに詳細に検討を重ねた結果、天理本の「本文」上巻全体及び下巻の第六

十九番までと「抜書」を初代元宜道仙が筆録したが、その段階で伝書を二代元永道意に譲り渡した。元永は、未作成だった「抜書」の目録を書写したが早世する。その後再勤した元宜は残りの大部分の曲を追加筆録したのであろうとして、結局、天理本の大部分は山脇和泉家初代元宜道仙の手になり、その後を和泉家古本の筆録者でもある三代元信道甫が補ったものであるという推論に到達する。

これらの論考はいずれも原文（台本詞章）の厳密な対比・字体の考証によって論述されているのであるが、第一章第一節から第三節に及ぶ天理本の筆録者に関する考察は第一節・第二節と第三節とでは異なる結論が提示されている。第一・第二節においては天理本の上巻と下巻とで言語の状況が異なるが、それは同一筆録者の規範意識の弛緩によって言語的変容をきたし、中世から近世初期にかけてのいわゆる台本定着期における狂言台本の流動的な姿を示すものとして判断され、筆録者を特定するというところまでには考察が及ばなかったということなのである。本書の「あとがき」で述べられているように、天理本の筆録者に関わる問題は小林氏が『狂言六義全注』（北原保雄氏との共著）の作業以来、ずっと抱いて来られた問題であって、それぞれの時点での経緯を踏まえて考察を重ねて来られた結果によるもので、まさに研究の発展の過程を表しているものと言ってよい。天理本『狂言六義』のような筆録者や成立事情に絡む問題をはらんでいる資料においては、台本詞章の言語的対比と筆跡の検証は避けて通ることのできない最も重要な作業であり、言語資料としての天理本の性格を考察する手順として、最初に踏襲されなければならないことなのである。天理本の上巻から下巻へかけての使用言語の質的変化や筆録者を明らかにするために筆跡の検討を重ねていく過程は、論理的で説得力があり、まるである事件の謎を一つ一つ解いていく推理小説を読んでいるようで、極めてスリリングであって、本書の冒頭に相応しい論考となっている。

第二章は、和泉流の狂言台本として天理本に次ぐものであり、その詞章は天理本と同様の古相をもとどめながら、また、中世的狂言から近世的狂言への変容の様相を呈し、台本としての体裁が整ってきているといわれる和泉家古本『六議』（山脇和泉家三代元信道甫の筆録）の言語資料としての性格について考察する。具体的には「ゴザアル」と「ゴザル」、「マラスル」と「マスル」、仮定条件の接続詞「サラバ」「サアラバ」と「ソレナラバ」等を通して和泉家古本を分析し、天理本におけるこれらの項目の様相と比較して、次のように明らかにする。すなわち和泉家古本は天理本と共通する性格をとどめながら、言語面をも含めて台本としての固定化・類型化の方向が認められ、近世初期から中期にかけての狂言台本の詞章の整備・洗練の過程を示すものとしても、また、言語史的な推移の反映という点でも、極めて重要な位置を占めるものであるということなのである。

第三章は、近世初期の大蔵虎明本や虎清本が中世的な要素を多くとどめるのに対し、近世における整理・統一の手の加わった、

完成された台本詞章を有する大蔵流宗家の代表的な台本、大蔵虎寛本（寛政四年書写）を対象として、その本文が唯一、笹野堅氏によって翻刻されている『大蔵虎寛本能狂言』（岩波文庫）において、衍字あるいは脱字として校訂されている箇所を、送り仮名や活用語尾の補入あるいは書写当時の言語状況の反映の実態など、全体に亘って詳細に検討し、言語資料としての虎寛本の資料性について考察する。そして、衍字あるいは脱字として扱われた例の中には近世中・後期の語形や語法などが混在しており、それが虎寛自身あるいは他の狂言師によって、実際に舞台において用いられていたかどうかという疑問を提示し、虎寛本の詞章を言語資料として位置づけるにあたっては、実際の舞台で用いられる言語と台本の詞章との関係をも考慮していくことの必要性を説く。このような小林氏の資料に対する緻密性、厳密性に関しては、エネルギッシュな姿勢を大いに感ずるが、狂言が舞台において口頭で発せられるものであるという点からみた場合、言語資料としての狂言台本の資料性には限界があるということを考慮に入れる必要があるのではないかと思われる。

第Ⅱ部　狂言台本を対象とする語彙・語法の研究

第Ⅱ部は、

第四章　話す行為を表すことばの待遇的考察――大蔵虎明本を中心に――

第五章　天理本『狂言六義』の用語

第六章　版本狂言記の言語

第一節　二段活用の一段化

第二節　「ゴザル」「オリャル」「オヂャル」とその否定表現形式

第七章　固定期狂言台本における「ゴザリマスル」

第八章　大蔵虎光本狂言集の本文の異同について

第一節　待遇表現に関して

第二節　文法的事象に関して

第三節　疑問詞疑問文における終助詞「ゾ」

の五章からなる。ここでは第Ⅰ部で行った言語資料としての考察を踏まえた「狂言台本を対象とする語彙・語法の研究」が中心である。第四章は古代語から近代語への〝言う〟行為を表す待遇表現の変遷のうち、近代語の成立過程をうかがわせる大蔵虎明本をもとに、史的観点からの考察をしたもので、とりわけ、尊敬表現に関しては「オシャル」と「オッシャル」の語源について、大塚光信氏の「オシャル」は「仰セアル」「オセアル」から、「オッシャル」は「仰セラルル」からとした考えを、虎明本の「オシャル」活用の実態から確認するとともに、謙譲表現に関わる「申ス」の使用状況のうち、「申サルル」について、現代における用法、すなわち「ただいま議長が申されましたように……」の「申サレル」とのつながりを考慮に入れて検討する。その結果、「申サルル」が「丁重語＋尊敬語」として、さらに荘重的表現として発達してきているさまを認めながらも、中世以来尊敬語として一般化していた

とみるのは問題であろうという発言は、狂言の言語を考察するに際して小林氏の有している日本語史に関する深い理解と認識に支えられてのものであると言ってよい。第五章は天理本の用語に関して、同時期成立の大蔵虎明本に比べて、当時の時代語的・俗語的な用語と思われるものが目立つことに注目し、「前世」(「前々」の意)、「はっさい(発才)」(おてんばの意)、「あせらかす」(機嫌をとるの意)、「ありやかる(有り明かる)」(すっかり夜が明けるの意)、「負ひ越やす」(背負って越すの意)、「かぶらかす」(船などを揺り動かすの意)、「きする」(叩くの意)その他の用語を取り上げ、意味の考察、他文献との関連、和泉流における天理本以降の台本における用語の継承の状況などについて検証する。これらの用語の中には、大蔵虎明本には見られず、天理本での使用例が文献上初出か、それに近いと思われる語も多く含まれており、天理本が近世初期頃の言語資料として極めて貴重なものであること、また、これらの用語に関しては、天理本に続く和泉家古本においてそのまま継承されていることが多かったが、その後の古典文庫本や三百番集本では、他の表現形式に置き換えられる傾向が顕著であり、台本ごとの用語の状況については、さらに広く追究していく必要性があることを説く。本章で取り上げられた用語のうち、例えば「時刻」には文脈的意味として〈時の運〉〈運命〉という意味があるという指摘は、語の意味の考察をする上で大変重要な点であると思われるが、語の意味を単語レベルで考えるのか、文脈的に考えるのか難しい問題をはらんでいる。第六章は刊行年、刊行者等の違い、台本の素性のそれぞれから、言語的な違いを有する『版本狂言記』に関して、先学の研究に導かれながら、正篇・外・続・拾遺の各篇に見られる二段活用の一段化現象の実態(第一節)、待遇表現の上で重要な役割を果たす「ゴザル」「オリャル」「オヂャル」とその否定表現形式、すなわち「ゴザナイ」と「ゴザラヌ」、「オリナイ」と「オリャラヌ」「オヂャラヌ」の使用分布状況とその用法について詳細に分析・考察する(第二節)。その結果、『版本狂言記』は中世から近世への口語の流れを捉える上で軽視できない資料であるとする。第七章は江戸時代の狂言の台本に見られる流動の状況を日本語史の流れに照らして探ろうとするもので、ここでは敬語の表現形式に関して、前期の「ゴザル」から「ゴザリマスル」への使用の変遷が近世後期の大蔵・和泉・鷺各流派の固定・伝承期の台本にどのように反映しているかを考察する。そして固定期狂言においては各台本ともに「ゴザリマスル」を使用しており、近世期の狂言詞章の特色が認められるものの、その使用状況は各流派の台本それぞれによって一様でなく、使用頻度や用法などに相違が見られ、狂言詞章に関して、各流派の伝承においてさまざまな整備、改変がなされていることを指摘する。第八章は原本が現存せず、転写本が数種伝えられている大蔵流の分家、八右衛門派の狂言台本、大蔵虎光本(二種)について、待遇表現(第一節)及び文法事象(第二節・第三節)の各方面から、写本間の本文の異同の状況を整理・考察する。大蔵宗家の虎寛本が台本として極めて整備され、詞章の統一、正統的な表記がなされているのに

対し、虎光本では、詞章の固定化の度合いが低く、用語の選択などではかなり揺れ動くなどしており、自由な性格をとどめていることを指摘する。虎光本の二種、すなわち山岸本と岡田本とにおける本文の異同のうち、たとえば「⑫イヤまだ参詣を(参詣)致ぬ」「⑬ちと御異見(御異見を)被成たならバよう御座りませう」「⑭今から都へ登て粟田口(粟田口を)求てこひ」(二八〇頁)などの格助詞「ヲ」について、「『ヲ』を用いる方がより整った表現となっていると言えよう」と述べているが、「ヲ」の有無については文語的・口語的表現の過渡的状況を考慮に入れる必要があるのではないであろうか。

なお、第五章で、狂言台本における「置カセラルル」「置カサセラルル」のような「四段活用動詞+サセラルル」という変則的な接続形式の考察とともに、天理本独自の用語と目される対称の代名詞「ウヌシ」(「オヌシ」の転)について触れられ、「ウヌシ」は室町時代から多く見られるオ列音からウ列音への交替現象の一環として用いられたものとされているが、一方では「オノシ」という語形が見られることからすると、「オヌシ」を基準にして、オ列音とウ列音の交替、もしくは順行・逆行同化の現象という考えもあり得よう。いずれにしろ天理本の用語には、史的観点から極めて興味をそそられるものがある。

第Ⅲ部　狂言台本その他を資料とする語史・語法史研究

第Ⅲ部は、

第九章　否定表現の変遷——「あらず」から「なし」への交替現象について——

第十章　「ゴザナイ」と「ゴザラヌ」、「オリナイ」と「オリャラヌ」「オヂャラヌ」——その消長と待遇法——

第十一章　「ウゴク(動)」と「ハタラク(働)」——中世における意味変化を中心に——

第十二章　慣用表現の成立と展開

第一節　「憎まれ子世にはばかる」考——ハバカル・ハビコル・ハダカル——

第二節　「真っ赤な嘘」考——マッカナ・マッカイナ・マッカイサマナ——

第三節　「(言わ)んばかり」考——成立過程と現代語への流れ——

の四章からなる。この第Ⅲ部は、Ⅰ部・Ⅱ部の発展あるいは応用としての考察であり、中世から近世への語史・語法史の研究の有力な言語資料として、各流派の狂言台本を取り上げ、他の諸文献などの言語状況とも比較しつつ検討したものである。第九章は『あゆひ抄』や佐伯梅友氏によって指摘されている「あらず」から「なし」への交替現象について、主として古代、中世を中心として論考し、室町時代以降については抄物やキリシタン資料とともに大蔵虎明本・天理本を資料として扱い、中世末期には「アラズ」から「ナイ」への交替がほぼ完了したことを詳細にあとづける。第十章は第六章で『版本狂言記』を対象として取り上げた、「ゴザナイ」と「ゴザラヌ」、「オリナイ」と「オリャラヌ」「オヂャラヌ」という否定の表現形式について、その成立と消長、また、待遇表

現における用法について考察する。第十一章は語彙考証の一つとして、「ウゴク」と「ハタラク」を取り上げ、特に「ハタラク」を中心に、中古から中世にかけての意味変遷を捉え、室町時代において「ハタラク」は、《行動・振る舞い》のような意味から転じて、戦場での《活躍》あるいは《出陣》の意味で使われ出し、やがて現代語の《労働・仕事》の意味に近づいている使用例が抄物やキリシタン資料などと同様に、狂言台本においても見られるという。第十二章は慣用表現の成立と展開の諸相を考察したもので、第一節は「憎まれ子世にはばかる」の「ハバカル」が通常の〈遠慮する〉〈つつしむ〉という意味とは違う点を問題として、その意味の成立に関して、「ハバカル」の語史を考察する。第二節は「真っ赤な嘘」という表現の成立に関して取り扱ったもので、古くは正反対の意味を表す「マッカイサマ（真返様）」が異分析によって「マッカイナ嘘」の形で用いられていたが、色彩の赤をいう「マッカナ」「マッカイナ」と意味の混交を起こして「真っ赤な嘘」という表現が成立したものであることを論証し、狂言台本にも「真っ赤いな」の形が多く認められると指摘する。第三節は「どうだ、と言わんばかりの態度」のような「〜んばかり」の「ン」の文法的解釈について、史的変遷の面から考察し、語源的には「ン」は推量の助動詞ではなく、打消の助動詞であることを論証する。そして、「ンバカリ」の「ン」の解釈がゆれる背景に、推量「ム」に由来する「ン」と打消「ヌ」に由来する「ン」との同音衝突の問題が生じていることを指摘する。本章で取り上げられた慣用表現の成立や展開に関しては、この問題を考察する上でいずれも狂言の諸台本が貴重な用例を提供するものとして位置づけられている。

第Ⅲ部に収められた諸論考は、狂言台本の資料性および狂言のことばに関する第Ⅰ部・第Ⅱ部での研究の成果に基づいて、狂言以外の中古から中世に亘る多くの文献を参照し、日本語史に関する深い理解と認識を通して、慎重かつ厳密な態度で意欲的に考察されたものである。小林氏が目指す研究の最終目標がこの第Ⅲ部に置かれていることは本書の三部構成の順序からも窺えるところであるが、たたみ込むような論述はダイナミックな広がりを感じさせ、読む者に新たな研究意欲を喚起させるものがある。「あとがき」に記されるように、今後『狂言六義全注』に基づく総索引の完成と相俟って、その索引を活用しての更なる語彙・語法の研究が発展されることを願って止まない。

最後に、本書全体から享けた小林氏の、資料に即して問題の事柄を厳密にかつ徹底して考証する研究姿勢に、同じ中世日本語の語彙・語法研究に志す者として多くのことを教えていただいたことを感謝し、併せて後学に是非本書を薦めたい。

（二〇〇〇年七月二〇日発行　勉誠出版刊　A5判　四八一ページ　本体価格一六〇〇〇円）

——東洋大学教授——

（二〇〇一年四月一七日　受理）